

列柱構造と張付壁

「古代から近世にかけて貴族住宅には土壁がない。…まずないといって差支えない。古代の寝殿造の場合、仕切りとなる壁そのものが少なく、間仕切りをする場合には今日のふすまを柱間にはめこんだような張付壁とした。」（太田博太郎「床の間」(岩波新書1978年)）

これを読んだとき二つのことが頭に浮かんだ。ひとつは半間(約90cm)の柱間に入ったハメ殺しのふすまで、壁にすれば耐震要素として有効なのにわざわざ建具?と不審に思ったこと。もうひとつは、諏訪大社前宮で見た”十間廊”という壁が全くない建物のことだった。人の住まいには壁が必要だが、この儀式に使う建物に壁は必要なかったのだ。そして壁なしで(火災や再建を経ているが)何百年も立ち続けている事実。



さらに太田博太郎氏は「建具は職人の手を借りなければつukれないものである。昔の農家では骨組みだけ職人につくってもらい、壁を塗ったり、屋根を葺いたりする仕事は、農民の共同作業である『ゆい』によった。手間賃のいる職人の仕事はできるだけ少なくすることが必要であった。…農家の壁は農民自身でつukれる土壁であった。」とも述べている。

つまり、貴族の住宅に壁はなかったし、農家も構造のために壁をつくったわけではなく、柱間を塞ぐための手近な材料が土やワラだったということだ。柱間半間にふすまをしつらえたのは、座敷や”おもての間”などの晴れの空間は、自前の土壁などではなく、職人さんの技を込めた建具をとの意図だったのだろう。耐震壁にすればなど、ピントはずれな傲慢な見方だったと自らを恥じた。

伊藤ていじ著「日本デザイン論」（SD選書）にも壁のことが書かれている。

西洋と日本や東洋における壁に対する考え方の相違について、「日本の壁は造作工事の一部であるが、西洋の壁は軸組工事の一部である。それゆえ日本建築では壁を取りはずしても建物は壊れないが、西洋の建物では壊れてしまうだろう。…日本の住宅（伝統的な日本建築）では開口部は、壁と同様にパーティションの一部であり、塞がれていない柱間である。」としたうえで、造作工事以前の、《基本構造》の典型を含む軸組が、伝統的な日本建築の特色であるとし、「一定のパターンをもった柱群は、基本構造の象徴で…柱こそ日本の伝統的な空間の性格を解くひとつの重要な鍵である」と述べている。上棟直後の建物のすがすがしさ、柱群が見せる力強さと美しさが、工事が進むにつれて勢いを失っていくことを思うと、この記述には大いに心惹かれる。

しかし、建築士は木造建築は壁が命と教わってきたし法規がそうになっている。規準の決め方に思いを馳せていた時、外壁不燃の規定について書かれたこんな記述に出会った。「ハウスメーカーの家の無国籍な感じは、外壁に使われている材料によるところが大きい。…大正8年、内田祥三という火事に詳しい建築の大家が決めた防火に関する法律(市街建築物法)（原文のまま）によるものです。…それによって失われたものは大きかった。…いまみたいな東京の景色でも、外壁に木が見えていたら、印象は全然違うでしょう。内田祥三は、晩年、…関野先生と一緒に街を見て歩きながら『間違ったかなあ』って言ってます。もう遅い。…内田大先生が、あの時点で、木をモルタルで塗りこめるだけでなく耐火の木造を考える方向に行ってくれたら、後の様子はだいぶ変わったでしょう。」藤森照信「建築が人にはたらきかけること」(平凡社2020年)

そして、日本の現状と今後について、伊藤ていじ、今和次郎の両氏はこう指摘している。

・今和次郎「日本の民家」（岩波文庫 初版1922年）

「一般に日本の建築は構造方面に科学的な分析を用いることに欠けている。…柱や桁や束や貫などのお互いの結合をよく考えていない。多く形式にばかり拘泥して構造の創造という着実なことに無自覚なことを、昔の日本人にも今の日本人にも感じられてくる。…この点から全く新しい教養を建設させていく必要があると思う。」

・伊藤ていじ「日本デザイン論」（SD選書1966年）

「…日本の伝統は、もはや西洋の合理的精神の支持なくしては生きのびることができない… 私たちの片足は、たしかに古い日本の過去にのっかっているが、他の片足は西洋の過去にのっかっている。私たちが西洋の文化を研究し勉強するのは、東西の相違を知るためというよりは、むしろ私たちの片足を学ぶためである。古いもの全てが伝統ではない。未来への発展や新しい創造への可能性をもったもののみが伝統の名に値するものだと思う。日本の文化においては、西洋の合理精神の洗礼を浴びせる必要がある…」

均一でない材料、不安定な接合部、地域ごとに多様な基本構造、この難解な木造の建物の耐震性能評価は、実はすでに限界耐力計算によって可能となり、国交省や文化庁の推奨もあり多くの貴重な建物が生き遺る根拠を与えられ、実際に救われている。たが、この夏さらに深化をとげ、伊藤ていじ氏のいう《基本構造》の典型を象徴する柱群・列柱としての耐力評価が加わった。アジア・太平洋戦争以前の研究を、80年を経て今日につなぎ伝統的な建築物の柱・梁・差鴨居といった本来あるべき姿、基本構造が評価できる段階に至った。冷静に考えれば当たり前のことだが、基本構造が重要で壁は造作工事によって作られるプラスαの要素と考えると多くが腑に落ちる。

(2023年9月)